

[PR] 外壁塗装はまだするな！平均40万円安くなります

新・コンサートを読む

他の連載記事はこちら >

天守閣の下の《トスカ》 ピアニッシモの激情 = 梅津時比古

毎日新聞 2018年10月21日 東京朝刊

クラシックナビ > 社会 > 芸術・文化 > カルチャー > 紙面掲載記事 >



= 梅津時比古撮影

名古屋城の天守閣の下に広い仮設舞台がしつらえられ、教会の内部がセットされていた。夕闇、あるいは曇りなのか、灰色の空に思いがけず引き立つ金のしゃちほこが一對、表面に水が流れるような輝きを見せている。雨の天気予報もあり、つい目が空へ向かう。

仮設舞台の下をピットにした吉田裕史指揮ボローニャ・フィルハーモニー管弦楽団がオペラ《トスカ》の冒頭、野外とは思えない圧力のフォルティッシモを響かせた（9月8日）。城と教会を接合した若干の違和感が吹き飛んだ。

吉田は「このオペラは、最後まで《全力で》という指示のフォルテで終わるのです」とプログラムの対談で語っている。だが、吉田は言葉をのみ込んでいたのかもしれない。（実はそれ以上に重要なのはピアニッシモ）と。

オペラ《トスカ》は、歌手のトスカ（アマリッリ・ニッツァ）に《歌に生き、愛に生き》、トスカの恋人の画家、カヴァラドッシ（カルロ・ヴェントレ）に《星は光りぬ》の名高いアリアがあるにもかかわらず、悪役スカルピア（ジョヴァンニ・メオーニ）が全体の構造を支えている。権力によってすべてをかなえようとするこの悪辣（あくらつ）な警視總監は、金や異性への欲望を満たすためなら人を死に追いやることも何でもない。狙いを定めたトスカへの迫り方も手が込んでいる。まず、恋人のカヴァラドッシが浮気をしているとトスカに疑いを抱かせる。トスカを呼び、政治犯をかくまった容疑で逮捕したカヴァラドッシを隣の部屋で拷問し、その悲鳴をトスカに聞かせる。そして、彼の命を救いたいなら、とトスカに情交を迫る。この悪役が恐ろしければ恐ろしいほど、オペラ《トスカ》はすごみを増す。

今回、スカルピアはすさまじい形相を見せるのではなく、自らの欲望を淡々と処理する官吏の不気味な冷やかさを見せた。対して、狙われるトスカは髪を振り乱し、あがき、必死の抵抗をする。窮した彼女が、情交との引き換えにカヴァラドッシと自分の国外脱出の通行証をスカルピアに書くように求める。スカルピアが書いている背後を、ペン先に時に目をやりながらなお迷い歩いているトスカは、食卓の上にナイフを見つけて手に取る。その自然な動きから、ナイフを手の内側に隠すまでの数分、経過の和音を奏でている弦楽器を、吉田はピアニッシモに抑えた。ほのかに光を映す天守閣や、しゃちほこをのみ込んだ空の高みの闇が、目に入ってくる。すべてが静止している。激情が、夜空に氷のように貼りついている。

その瞬間から、この野外オペラは変わった。音楽が周囲の自然と一体化した。

やがて、氷が解け、トスカはスカルピアを刺す。ピアニッシモも解け、オーケストラが咆哮（ほうこう）する。スカルピアが既に仕組んでいた策略でカヴァラドッシが殺され、絶望したトスカは城壁から飛び降りる。大団円のフォルティッシモに、闇がゆらめく。

終わると、待っていたのか、すべてを洗い流す雨が降り始めた。（特別編集委員）